第２回教育懇談会議事録

日時:平成24年7月27日(金)13:30～15:30
場所：愛知県三の丸庁舎　アイリスルーム

＜大村知事＞

みなさまこんにちは。本日はお忙しい中、第2回の教育懇談会にご出席いただきましてありがとうございました。

また、今回、特別参加という形で、愛知県公立高等学校入学者選抜方法協議会議の議長を長年にわたって務めていただいております、中京大学現代社会学部教授 村上隆様に参加いただいております。よろしくお願いいたします。また、前回に引き続き、日程をやりくりしていただきまして、お忙しい中、江川達也様にご出席いただきました。重ねて感謝を申し上げます。よろしくお願いします。どうか、今日は言いたい放題言っていただきたいと思います。

前回は、5 月 29 日でございまして、「愛知の教育を巡る現状と課題」について、フリーディスカッションということで、まさに談論風発という形でご意見をいただきました。

例えば、江川さんからは、「メディアが発達する中で、映像教育などを積極的に取り込んでいったらどうか」とか、「教員の教育のあり方についてどうか」とかいったご意見をいただきました。

また、江口さんからは、「複合選抜制度の導入の後の地域の格差の問題」といったご意見をいただきました。

また、柴山さんからは、「企業の求める人材ということで、基礎的な学力・能力を備えた人材ということを求めている」といったご意見をいただきました。

また、白石さんからは、「今の学生が非常に内向き」だということでのご懸念だとか、「教育現場に専門家を登用するなど、教員の多様性が必要」といったご意見をいただきました。

また、谷口さんからは、「学習指導要領を少し超えた愛知県独自の教育を特区などを使ってやってみてはどうか」といったご意見などをいただきました。

また、中野さんからは、「専門高校から大学にもっと柔軟につなげるべき」とか、「教育実習が現場にソフトランディングできるような形にしたらどうか」とか、そういったご意見をいただきました。

また、松田さんからは、「高校の多様化が進む中での高校と大学との連携、高等教育の視点から、中等教育を見直すことも必要ではないか」といったご意見をいただきま

した。様々なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

このご意見の概要ということで、ホームページにアップさせていただいております。よろしくお願いいたします。

この懇談会では、これから、具体的な課題・テーマについて、議論をしていきたいと考えておりますが、前回、皆様からいただいたご意見を踏まえまして、検討した結果、今回は、「社会の成熟化に対応した愛知の中等教育のあり方について」と題しまして、特色ある高等学校づくりや高校入試制度のあり方について、ご意見を伺ってまいりたいと考えております。

成熟社会を迎えまして、社会のニーズや価値観が多様化するなど、大きく社会は変化をしております。企業では、年功序列とか終身雇用といった、雇用システムがある意味では崩れていく、変わっていく中で、いい大学、いい企業に入れば、終身、保証されるという時代ではもうなくなってきているのではないか、また、前回の懇談会で江口さんから指摘がありましたように、グローバル化が進みまして、高校を卒業して小さな企業に勤めていても、ある日突然、海外勤務を命じられるといったことも普通にある、そういう時代になってきているわけでございます。

そういう中に対応して、特色ある高等学校づくりをどうやっていくか、子どもたちが自らの道を選択し、意欲を持って学べるように、普通科や専門高校の教育をどうしていくか、どこに重点を置いていくかなど、様々な観点からご意見をいただけたらありがたいと思っております。

また、この特色ある高校づくり、高校のあり方、それから、中学校の教育のあり方を規定する意味で、決定的に重要な問題が高校入試制度でございます。日本の教育の場合、学校の在り方というのは結局、大学入試と高校入試で、それに向けてやっていくというのはある意味で必然だろうと思いますが、そういう意味で今回、私はかねてから問題意識を持っておりますが、愛知県の高校入試制度、現行の複合選抜制度が、平成元年、1989 年からスタートですから、これで 25 年ということになるわけでございます。その前に 15 年ほど、例の学校群制度ということでございました。私もちょうど、学校群の世代ということでございますが、そういう意味では、戦後はいわゆる 1 回、個々の入試制度を 30 年近くやり、その後、学校群制度になり、複合選抜制度になっていくということでございまして、社会環境の変化していく中で、今後の入試制度のあり方、これをどう持っていくべきか、原点に立ち返って、私は議論すべきではないかというふうに思います。

例えば、２校受験がいいのかどうか、また地区やグループ分けの問題、さらには学力検査の方法や、内申書と学力テストの比重などなど、いろんな議論、課題があると思いますが、そういった現行制度のあり方、課題などにつきまして、様々な角度から、今日

はご意見いただければと思います。

なお、教育委員会でも同じく議論の場といいますか、実務的な観点からも進めていただくわけでありますが、それはそれといたしまして、大きな大枠の方向づけといいますか、そういった、新たな角度からのご意見はこの懇談会でいただければありがたいというふうに思っています。

ぜひ、子どもにとって何が一番良いのかという観点からのご意見を、是非お願いができればというふうに思います。

今日は限られた時間ではありますが、2 時間たっぷりと、みなさんご意見をお伺いしたいと思います。今日の場は公開であります。マスコミの方にもフルオープンですし、前回、1 回目は事務が整いませんでしたが、今回、ご希望者が結構おありだということもありまして、一般の方も、希望者の方に傍聴していただくことも、今日はやらせていただいておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

今日の会議が実り多いものになりますようにお願いして、冒頭のあいさつとさせていただきます。よろしくお願いします。

〔事務局から出席者紹介・資料確認〕

＜大村知事＞

それでは、早速、懇談会に入らせていただきたいと思います。

本日の議題は、「社会の成熟化に対応した愛知の中等教育のあり方について」ということでございまして、社会の変化に対応した特色ある高等学校づくり、高校入試制度のあり方などにつきまして、ご意見を伺ってまいりたいと考えております。

議論に入る前に、まずは、事務局の方で資料を準備しておりますので、手短に説明をお願いします。

〔事務局から資料説明〕

それでは、皆様からご意見を伺ってまいりたいと思います。今回は、前半と後半に分けまして、前半は、特色ある高等学校づくりについて、後半は、高校入試のあり方について、という形で分けてご意見を伺っていきたいというふうに思っております。

前半、後半でご意見を伺ったあと、フリーにご意見を言っていただければというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

まずは、前半の特色ある高等学校づくりについて、社会の変化を踏まえ、普通科や専門高校の教育をどうしていくのか、どこに重点を置いていくのかといったことにつ

いて、ひとあたり、まず、皆様のご意見をお伺いをしてまいりたいと思っております。

それでは、まず名簿の順に、江口様から順番で言っていただいて、後半の高校入試の方は、逆の順番でということでお願いをできればと思います。

それではまず江口様よろしくお願いいたします。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

最初、一人目ということで、あまり長くしゃべるといけませんから、私からは一点だけ、特色ある高校づくりについて意見を申し上げたいと思います。

先程、冒頭に知事がごあいさつの中でも触れてらっしゃったと思うのですけど、高校の特色づくりの話というのは、入試制度との関係というのが深いというように思います。高校の特色といっても、学科づくりとか、時代に合わせた職業ですね、時代の変化とともに職業も変わり、それに合わせたような学校づくりという学科づくりみたいなところに目が行きがちかもしれませんけど、実際の高校というのを見てみますと、特色というのは、例えば、ここはすごく進路指導に熱心だ、部活動を一生懸命がんばる、体育祭とか文化祭が楽しい、地元の中学出身の子がたくさん集まる、あるいは広域から人が来る、制服がかわいい、校舎がきれいなど、そういうのも含めて、いろんな特色の持ち方ってあると思うんです。ここで、一つ大事だなって思うのは、高校の側が特色づくりをしようと思っても、その高校が打ち出す特色に共感するような保護者の方や生徒たちが、その学校を選択できるような入試制度でないと、行きたくても行けないということになってしまうわけです。ですから、特色づくりをするためには、そこに入ってくる子たちの入学意欲、志望意欲が高い子達が集まる高校にすることが、まずは高校の特色づくりをしていく上での大前提だというように思います。

ですから、後半の入試制度の話と関連が出てくる話でありますけども、私は、まず、特色づくりということで言うと、幅広い選択を生徒、保護者、受験生に認めるというに入試制度にするということが第一ではないかと思います。

＜愛知県経営者協会専務理事兼事務局長　柴山忠範氏＞

企業側から見ますと、現在、高校生、大学生というのが、1 つの括りでなかなか考えられない状況になっております。特に大学生について言えば、二極化とは申しませんが、上下の格差がかなり開いてまして、いわゆる従来の大学レベルから、こう言ったら失礼ですが、大学レベルとは思えない大学生まで、非常に拡がってきている。それによって、企業が採用した大卒者に対する、いわゆる業務、これから何をやっていくのか、あるいは、将来どういう育て方をするのか、オーバーに言えば二極化しております。端的に言えば、従来、高校卒の人が担ってきた業務が、多くの企業では大学

卒の人がやっているという現場もかなりある、こういう状況にあると思います。

高校において、企業サイドの人材、これは大学生も同じような状況なんですが、例えば、自発性がないとか、自分で問題を探していく力がないとか、教育現場に我々携わっているわけではないので、よく分からないですが、やはり、与えられたものを素直に受け入れて高校を卒業する、あるいは中学時代からそのまま素直に受け入れられていく、自分が自ら求めていくという姿勢が、逆に言えばあまり必要ない状態で育って来ているためではないかなと私どもは考えています。

私の高校時代を顧みれば、非常に自由な校風のところで育ってきたので、ある面でいけば、伸びる子は伸びるし、伸びない子はどんどん落ちていくという学校だったんですが、中学から上がってきた子どもたちをどういうふうに育てていくかというところに、それぞれの違いをつくっていかないと。もっと自由な雰囲気でやったほうが伸びる人と、ある程度まだ中学の延長線上で、高校がある程度手取り足取りやったほうがいい生徒と、こういうことがかなり別れてくると思いますので、教えることに違いはあるわけではないですが、教え方なり、本人の伸びていく環境というところに違いをつけていってほしいなというふうに思います。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

一点目の何のために特色ある高校を作っていくか、この答えはやはり、愛知県として多様な人材を作っていくということと、それぞれの学校が、切磋琢磨しながら、さらに特色あるよい教育を実施していくという、この２つが大きな目的ではないかと思います。

特色ある高校づくりに対し、誰も反対する人はいないと思うんですが、ただ、保護者のご関心の一つに、やはり、これだけ大学進学率が高くなってくると、子どもをどこの大学に入れるかがあります。

大学の立場から申し上げますと、アドミッションズ・オフィス、ＡＯという入試のスタイルがあり、1990 年に慶応大学が始めて、特色あるお子さんを高校時代の実績とか活動で、多面的評価をしながら入れていくという入試ですが、文科省の中教審でも、これが大学の学力を落としているんじゃないかというような批判も出たりしていますし、分数の複雑な計算ができなかったりする人もいるんですね。つまり、ＧＰＡという高校時代の得点と面接と論文で入ってくるわけですから、一般の入試を経ておりません。したがって、いくら特色をだしても、ベースとなる基礎学力をきちんと押さえていかないと、保護者の方たちは、もうちょっと基礎学力づくりをちゃんとやってよとということになりかねません。理科教育重視もいいけど、全体をやって、センター試験を通過できるような能力をつけてというご意向が出てくるんですよね。早稲田な

ども、相当ＡＯの受験比率を落としていますし、九大の法学部も確か、止めたと思います。ＡＯで入ってくる子達の学力の維持力は、一般入試よりも維持されるという積極的評価をしている学校もあれば、ダメだと評価が非常に分かれるところで、まだ、結論でてないんですが、少子化と定員割れで相当、大学入試制度も変わってきます。保護者の方たちに、子供たちを特色ある高校に入れて、ある能力を伸ばしていこうと思ってもらうためには、ベースとなる基礎知識を効率的に押さえ、その上にプラスオンの特色を出すかということが勝負になってくるのではないかと思います。

やはり、特色ある教育をするためには、それができる人材が必要でございます。校長先生が「うちはこういう教育をやるんだから」という方針を明確にし、人事権はしっかり持って、やっぱり、自分の教育方針に対して賛成してくれて一緒にやってくれるチームづくりができるような人事制度でなければ、これはできません。人事のほかにも、中高連携、高大連携といいますか、子供たちが高校を選ぶ上で、私は何に向いてるの、何が好きなのということを、今、漠然としたなかで選んでいるような気がするんですね。やはり、ものづくりが好きだから、理科が好きだからということを客観的に見れる機会が無ければ、いくら高校側で特色を出しても、その時の親御さんで、これからは理系の時代だから理科教育のところにいきなさいというふうに言われて、それに乗るような判断力のない年代でございます。

従って、中学の間に、進路指導をどうしていくかということと、その子が持っている能力というものをどう明らかにし、客観視をして、一緒に進路指導をできるかというような体制も重要になってくるんではないかと思います。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

私の方からは２点、ご提案があります。

一つは、専門領域の単位制高校をつくったらどうかというご提案です。現在の愛知県では、資料３にありますように、国際理解に関する学科・コースは、既存の学校内で設定し対応しています。けれども、もう少し踏み込んで、学校そのものがこういうコース全体であるようなことを発想したらどうかと思います。

前回の懇談会で申し上げました教育特区という意味は、そういう点です。例えば、東京では、都立国際高校というのがありまして、平成元年に作られているので、もう２４年くらい経っています。ここは１学年の定員が２４０人です。1/３から約半分の生徒さんが海外の滞在経験があるとか、もともと外国にいたとか、そういう人が占めています。この高校がやっているのは、いわゆる、英語教育だけでなくて、第二外国語だとか、１年の留学制度だとかということが売りにはなっているんですけども、いわゆる知識をベースにした上での、課題発見解決力、コミュニケーション力、思考力、

創造力などのPISA型学力的な国際理解をねらっています。

こういうことを大阪府が教育センター附属高校というのを２年前につくっておりまして、カリキュラムの柱がPISA型学力です。ここは、理科教育、英語教育の両方やっているんですけれども、そういった特色ある府立高校を立ち上げています。このように、東京や大阪では、府や都が独自の色を出した高校を文科省の学習指導要領外で認可されてやっております。こういったことをぜひ、名古屋でもやるべきではないかというのが一つです。

もう一つが中高一貫高校でございまして、これも資料４の「その他」のところに、山間部における地域に根ざした人材の育成ということでありますけども、やはり都市部においても、公立の中高一貫教育というのが、名古屋の規模だったら、十分成立しうるし、特色は出せるのではないというふうに考えております。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

教育というのは、結局、人が人を育てるわけですね。要は教える人の育成もかなり関わってくると思っております。一つは、誰でも高校に入る時は入ってから頑張ろうと必ず思うはずです。教える方の先生方、学校側が受入れた生徒を３年間で育てるのだという構えでいかないといけない。結局、そこにかかってくると思っています。制度とかいろいろありますけれども、確かにいろいろな自分の能力を発揮できるようなところを選んで行きたいし、それが発揮できるような状況をつくっていかなければいけません。それは人が人を育てるわけですので、まずそこを考えていかなければいけないと思います。

高校というは中学校から大学への間にあるわけですよね。中学校まで義務教育として、人間形成全てをやってくるわけです。そこからいかに自分の特長を次の段階に進めていくかになると、そこで高校での教育に特長が出てくる。前に申し上げましたように、工業であれ商業であれ、いろんなところで自分の能力を発揮できる、それが将来につながるということです。学校の中で、例えば何とかコースみたいな特徴をつくるのを地域ごとにあってもいいし、あるいは学校全体がそういう特徴があってもいい。例えばスーパーサイエンスであるとか、スーパーイングリッシュとかいろいろあります。こういうのはなかなか期限付きのものなので、本来的にはもう少し継続してやっていくといいのですが。期限が決まっていて、それが終わってしまうとそれ以後が盛り上がっていかないというのがあります。そこはモデルとかをいろいろ作っていったときに考慮していかなければいけないと思います。

先日、いまの入試センター試験の基礎を作った方（岡本道雄元京都大学学長）が亡くなりましたよね。実は入試センター試験を最初に作った意図は、最低限、大学に入

るための能力があるかどうかを調べて選抜するということにあったと聞いています。その後は、それぞれの大学が特徴を持って選ぶというための基礎的なベースの能力を測るためにもともとあったのだそうです。だから、高校での基礎的な能力、大学のための基礎的な能力を測って、それを通過した人はどこの大学でも色々と選んでいくことができた。選ぶほうは自分の特徴を持って選んでいくというふうにもともと考えられたのがいろいろ変わってきちゃったと、そういうことがあります。

とにかくそれぞれの段階で、どういうふうに次につなげていくかです。学校の特徴づくりというのは、先生方のチームを作っていく特徴づくり、学校そのものの形態をどうするかということを少し考えていくことです。教員の先生方の養成ということも時間がありましたら、少しあとでお話させていただきたいと思っております。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

少し視点を変えて、愛知の高校の特色を考える時に、県全体としての中等教育をどう特色付けていくかということ、同時に各校をどう特色付けていくかという、２つの視点があるんですが、全体の方でお話をしたいと思います。

そもそも教育というのは何のためにあるかということですが、僕個人が思っていることは、いわゆる社会的な資産の整備、あるいは資本の整備と言いますかね。つまり、今子どもの数が非常に減ってきて、一人ひとりの子どもが付加価値を持って、これからの日本を担っていくためにはどうすればいいかという観点で言えば、やっぱり教育の底上げがどうしても必要になってくるだろうと。これが長い目で見たときの日本が世界で生き残っていけるだけの人材をつくっていく、そのためには、落ちこぼれをつくらない、そういう底上げを中等教育も実現していく方向でどうだろうかと思っています。

僕の世代は、２５０万人おりました。今は、１１０万人。愛知県でも７万人ぐらいです。それがこれからどんどん減っていって、２０５０年には６０万人と言われております。そうなった時に、今のシステムの中でどのようにしていくかということは、一人ひとりの子どもにかける投資といいますか、資産を増やしていく以外ないだろうと思います。その観点で言えば、高校教育が決して無縁ではないわけです。愛知県は産業が最も活発な県ですし、それを維持していくためにどうすればいいかという、少し長いレンジで見て、今後の高校教育を考えていく必要があるのではないかという気がいたします。

そういう意味で言えば、高校進学率は、愛知県は全国で最低クラスですか。確認しないといけませんが、それは、大都市圏で共通な現象とはいえ、それを、どう上げていって、一人でも多くの子どもが高校教育を受けることができるかというステージを

きちんと考えていただきたい。それは、これからとっても大事になってくる気がいたします。いい大学に入るということだけが目的ではなく、競争ではなく、競い合いは必要だと思うのですが、競って争うことがあんまり教育の場には相応しくないだろうと考えます。

先日、トルコの方がいらっしゃってお話をしました。トルコは４、４、４制だそうですが、最後の４は、今までは義務教育ではなかったですが、来年度から全部義務教育にすると。つまり４、４、４の 12 年を義務教育にする。もちろん無償ですので、そういう制度をつくるという。日本よりも進んでいるなという話をしたんです。そういう国もあることも含めて、例えば愛教大では、今、高大接続ということで、一般枠という形で附属高校、西尾東、岡崎北、地域枠では田口、新城東、作手高校から大学生を入れていくということで、地域と掘り起こしをやっているところです。あるいは特別支援、盲、聾学校からの推薦ですね、そういうもので広く生徒を入れて県民に還元していく。本学は主に教員を養成する大学ですので、つまり過疎地等に教員を返していくという接続教育をやっていますし、そういうことが、うまく高校と接続ができて、特色ある高校づくりの一貫として、大学としてもお手伝いできるかと思っているところです。

あとは、幅広くこうした動きについては、広く県民の声、いろんな階層の意見を聞いて、いろんな意見が出ると思いますが、リーダーシップを発揮されてそれを集約していくようなことも必要かと思います。階層によって、思っている問題意識が違いますので、そういうことをぜひお願いしたいなということも含めて。

それから、県で理数科教育や国際理解教育を推進されているとのこと。これも、これからの愛知県のあり方を考えると、一つの特色ですのでぜひ推進していただきたい。

あと、もう一つ申し上げておかなければいけないのは、うちの大学もだいぶ古くなって、なかなか老朽化対策が進まないんですが、愛知県の高校はどうなんだろうかという気がしています。ぜひ、長期的に見て老朽対策をしっかりやっていただいて、子どもたち、あるいは、高校生がいい環境で学べるようなことも愛知県としての特色の一つになるのではないかなと思います。

＜漫画家　江川達也氏＞

まず、特色ある高校について、絞って考えると、一つだけ提案があって、開かれた高校をつくるっていうのが一番かなと思います。特色ある高校をつくるのは、全く賛成で、自分の限られた体験からいきますと、今高校３年生の長男がいまして、東京なんですけど、長男が高校受験の時に受験したいという高校に滑ったんですけど、その高校、結構いい高校で、名前出しちゃうと都立西高校。たぶんＳＳＨっていうのかな。

その高校は、結構科学とか、実験やらせたり、一番いいなと思ったのは、父兄が参加できるということ。この子が入ったら、俺はどんどん参加して、理数系の研究発表とかしたいなと思ったんだけど、運悪く、うちの子、内申がむちゃむちゃ悪いんですよ。何故かっていうと、態度悪いんで（笑）。先生に嫌われるタイプで、それは俺もそうなんですけど、ちょっと、モンスターペアレントっぽいんですけど、ついつい、先生の点の付け方に電話で文句いったりしちゃって、内申が相当悪くなって。今、中高一貫の高校で高入生で入って、この夏、野球部やって、ピッチャーやって、これから受験だということで、家の近所の大学だという理由で東大入試目指しているという、しかも、全然勉強しないっていう変わった子どもなんですけど、そういう子どもに一番合っているのは、自分で発表するとか実験が強い高校だと思う。で、父兄も参加できて父兄も発表できるような、そういう高校に入りたい人は結構いると思うんです。入れたいという父兄も。でも、そういう高校って、人材が少なくて、なかなか作れない。自分としては、そこに入れなかった高校生や父兄も参加できるように広げて欲しいなと、参加枠をね。地域の住民とか高校生を抱えた人たちが、参加できて、自由に開かれた高校を作ってくれるといい。受験する前に父兄がどういう高校かを見るときには、学園祭に行くんですよね。うちのかみさんは相当、いろんな所へ、学園祭へ子どもを連れて行って、ここの校風はどうだとか調査していて、高校も中学生とか高校卒業した人も入れるような開かれた学校を作って、あとは、例えば、おもしろい授業をやる先生がいたとすれば、今、放送大学に代表されるように、メディアで授業を録画して公表できているわけですよ。ですから、うちの高校ではこういうおもしろい授業をやっていますとか、こういうことやってますという形で、誰でも閲覧出来るような形で、開かれた高校作ってくれれば。そこの高校に入学できなくても、興味のある人達は、高校に入った後でも別の高校に行きながら質の高い授業も鑑賞できるような、そういう形にすれば、滑ったことによってその教育を受けられなかったという後悔がなくて済むと思うので、全てにわたって開かれた学問の場というのをつくっていただけると、皆さんも喜ぶんじゃないかと思います。

＜中京大学現代社会学部教授　村上隆氏＞

今回限りの出席でございますので、少し言いたいことを言わせていただきますけれども、皆さんが考えておられる多様性というのは、恵まれた人たち、つまり、多少変わっているのかもしれないけれども、特に障害やハンディキャップを持っていない方たちをだいたい頭に置いておられるように思いますが、そういう意味で、比較的ハイレベルな普通科は、それほど多様化が必要なのか、むしろ標準化の方が必要ではないかと思います。それぞれの子どもの個性というものがありますが、それは、それぞれ

学校内部でいろいろな形で対応していくことが可能ではないかと考えております。

むしろ問題なのは、到底そういう枠に入ってこない子どもたちたちがいるということでございまして、その辺りこそ、多様化が必要だと考えております。例えば、専門高校の内容をどうしていくのか、総合制高校をもっと増やせないか、あるいは単位制、昼間制、定時制というところですね。今、不登校になりますと、引きこもりになってしまう確率が非常に高いと言われておりますし、そういうために多様性が求められているのではないかということであります。

それからもう１つ、資料３の右下あたりを見てほしいんですが、私が勤めている豊田には、近くに外国人がたくさん住んでいる保見団地がありますが、そうした外国人に対しては、日本国民ではないがゆえに就学義務を負っていない、かつ、ここにもありますように、いろいろな対応がとられているにしても、基本的にボランティアです。日本人ではないからといって、この部分を放置しておいて、ボランティアに任せておいていいのかということです。これを放置しておくということは、その人たちの不幸だけでなく、愛知県にとって、先行き非常に大きな問題になる。最終的にその人たちを本国に返せばいいということではありませんよね。ということで、公教育で拾いにくいところの多様性ということをぜひご検討いただきたいということであります。

高校進学率 100％近い県も私は知っておりますけれども、それはそれで問題もございます。ですから高校進学率だけでモノは言えないと思います。例えば、本県は専門高校への進学率が高くて、そこで、高卒資格をとれるというような仕組みもあるということでございますし、進学率を無理やり 100％にすると定着という問題も出てきますので、そう意味での高校の多様化ということにとどまらない形での後期中等教育の多様化ということを改めて考えていただきたいと思います。

＜大村知事＞

ありがとうございました。ひとあたりご意見をいただきました。高校の多様化、特色ある高校づくりにつきましては、後ほどご意見いただければと思いますが、それでは、後半、高校入試制度のあり方について、現行制度の課題であるとか、入試制度はこうあるべきだということにつきましてご意見を伺っていきたいと思います。

それでは、先ほどの逆周りということで、本日特別参加ということでご参加いただいております、村上先生からご意見を伺いたいと思います。

村上先生は平成１７年度から７年以上、愛知県公立高等学校入学者選抜方法協議会の議長としてこの制度に取り組んでいただいております。複合選抜制度の現状、課題等につきまして、それを含めてご意見をお聞かせいただければと思います。

＜中京大学現代社会学部教授　村上隆氏＞

引き続きといいますか、今ほどは、私の個人的な意見を申しましたけれども、ここから先は、愛知県公立高等学校入学者選抜方法協議会議の議長として、協議会議での議論について、できるだけ客観的にお話ししたいと思います。

この会議は、愛知県教育長からの諮問を受けて、毎年、高校入試制度について議論しているわけでございますが、今年度の付託事項、諮問された事項は、「全日制課程における群およびグループにおけるあり方について」ということでございます。

委員は、２０数名の方々、非常に多様な方々にお集まりいただいているわけでございますが、毎年２回の親委員会の開催、それから、１回目の委員会で、ある程度議論した上で、専門委員会を開いていただきまして、そちらの方で議論をいただくことになっております。それで、今の全日制課程における群及びグループのあり方についてでございますが、結論から言いますと、当面、専門委員会のまとめとして、こういう形で全日制課程における群及びグループのありかたについて、このことを含めて実施した入学者選抜にかかる調査の結果等を踏まえ、次のように付する。ということで、主文でありますが、「全日制課程における群及びグループのあり方を中心に、有識者や教育関係者等における検討会議を新たに設置して、現行制度の利点及び課題について、幅広い視点から検討し、必要な改善を図ることが望ましい。」であります。

実は、私自身も、この結論を最初に伺いましたときに、これではちょっと丸投げではないかと。この委員会としてもう少し主体性を持った結論を出すべきではないかということを思ったわけであります。

しかし、２回目の会議でこの結論を伺い、今までになく非常に多くの方々から活発なご意見、ご発言をいただきました。やはり、これだけ様々な考え方が存在しているという中で、拙速に結論を出すべきではない。やはり有識者、あるいは専門家会議のほうでじっくり議論をしていただくということが必要ではないかと思うようになった次第であります。

まず、今日の資料のなかの資料５の右側の方に、複合選抜制度が平成元年度から実施されているとあります。

この制度については、おおよそご理解をいただいているものと考えて話を進めさせていただきます。その下に入学者選抜制度に関するアンケートの実施というところがございます。

今、２校受験が可能な現行の入学者選抜制度、これについて、「現行制度がほぼ概ね適切である」と考えられている方が、特に中学校の校長先生で７５．７％。現行の群及びグループ分けについては、「概ね適切」という意見が、高校を含めて過半数を占めております。

その一方で、推薦入学については、選抜基準について、ある程度改善の必要があると考えられている方が、３分の１程度あるということでございます。

個々の具体的な事柄について、いくつか専門委員会で議論されたことについてご紹介をいたしますが、基本的に現行制度については、支持する声が多いというわけですけれども、地域によっては２校受験を組み合わせていくことが難しい地域もある。特に、尾張に比べると三河地区の高校が絶対的に少ないということがございまして、三河地区において、はたしてグループ分けをしていく意味があるのかというようなことがございます。

それへの対応として、１・２群共通校というのがいくつか設けられているわけでございますが、これが一定の改善になっているということも認められるわけでございますが、一方では、地域からの生徒の流出ということが無視できない問題となっているということも伺っております。

それから、より細かいというか、具体の話となりますと、Ａ、Ｂグループの募集定員の偏りが少々出てきているというようなことですね。その点で問題があるということです。学力試験をはたして２度やる必要があるのか。２校受験をするとしても、受験が２度必要かどうか。これにしても、特に中学側において２回の受験は必要であるということで、例えば急病になることもあるわけだし、２回の受験機会が与えられている事によって、生徒のストレスの低減ということができているということではないかと思います。

他方、推薦入試については、基準のあいまい性であるとか、様々な側面から意見が出ているということで、これはやはり一定の見直しが必要ではないかということだと思います。

内申書については、私も質問しましたけれども、今回、特に議論はされなかったというように伺っております。

ということで、現状では、特に中学校において、現行の入学者選抜制度が概ね適切であるという声が多いということで、現行制度の利点を踏まえていくということ。その上で課題もいくつかあるわけですから、それについて、必要な改善をしていくというのが望ましいというのが結論であり、かつ制度の変更をしていくのであれば、受験生への影響を考えて一定の周知期間を取る必要があるだろうという形でとりまとめをいたしました。

＜漫画家　江川達也氏＞

入試に関しては言いたいことたくさんあるんですけど、まあ２点に関して。１点は、群であるとか、あと２回受験するのがいいのか悪いのか議論に上っているんで、それ

を打破する方法を考えたんで。まずですね、高校の特色を出すんであるならば、群はありえないですよね。だから、高校の特色を出すとなるとその高校の独自問題を作るのが一番いいと思います。どういう人間がほしいというときに、それで受験でクリアさせるんだったら、自校問題以外にありえない。これは論理的にそうだと思う。最低学力というものが必要だったらそれはそれでいいんですけど、やっぱりどういう問題に対してどう答える人間が一番いいのかっていうのは、多分、価値観の問題なんで、同じ問題であっても答えの違うことによって、A校には受かるけどB校には滑ると。そういうふうにすることが最も特色付けができる受験の体制だと思います。

あと、愛知県の良さっていうのは、東京だと金がかかるんですよ、教育に。私立が多かったりして、お金かけると東大に行けるみたいな。傾向として。最近は公立も頑張ってきて変わってきていますけど、公立に入るために河合塾などに行かなきゃいけないんで、まあお金が結構かかって、河合塾には結構貢献させてもらいましたけど(笑)。

愛知県の２校公立に受験できるっていうことは、昔だと公立に１校落ちちゃうと私立に行かなきゃいけなかったわけですよね。それがやっぱり、お金のない人でも２校受験することによって、１回ミスっても、公立に行けるってことで、これは絶対愛知県としては外せないことだと思います。お金のない人も公立に行けるってことで。

行きたいとこに行けない人が不満を残すっていうことがあるんですけど、これは提案なんですけど、まあ可能かどうかは分からないんですけど、東大なんかだと２年から３年に上がれない人がいるんですよ。普通の大学だとすんなり、勉強できなくても４年になって卒業して、まあ愛教大なんかは特にそうでですね（笑)、まあ、勉強しなくても結構卒業できたりするんですよ、これが。だから高校も３分の１か、まあ５分の１でもいいですけど、１年から２年に上がれるっていうか、トレード制みたいにして、希望でもいい、希望の人間と学校が指定した人間を、ＦＡ宣言じゃないけど、あのシャッフルできる制度にしてですね、上がれるし下がってしまうこともある、みたいな感じで、もう１回高校１年から２年に上がるときに、敗者復活戦だったり勝者敗者戦みたいな、そういう形で変わると、高校生活も緊張あるものになるんではないかと。これは多分反対意見が多数なんでならないと思うんですけど、論理的に考えれば、それぐらいした方が、これからの社会、終身雇用制が破壊されましたよね。なくなったと仮定するならば、高校でもなんていうのかな、終身自校制みたいなものを廃止して、高校同士がトレードできるようなシステムにすれば、かなりの部分、将来の社会体制にあった人材は当然育成できる。論理的にはそうですよね。まあ、現場での反対は必至ですけど。そういう提案です。

次に、一番言いたいことは、内申書の点数の比率が高すぎるということ。それには、うちの子供が公立に滑ったという恨みが半分くらいあるんですけど（笑)。だいたい、

高校に必要な最低学力って主要５教科以外のことがいるのかどうか、そもそも。家庭科ができることとか、美術ができることか、体育ができるとかね、そういうことが、はたして高校の高度な教育を受けるときに必要かどうかっていうところに疑問がすごく残ります。数学の特色を出すとするならば、そのほかの主要教科以外のものは特色がいるのかどうか。むしろ、逆に家庭科とか技術とかそういうのができる子が、それより数学ができる子を押しのけて数学の特色のある学校に行ってどうするって話はあると思います。

だから、美術ができる子、むしろね、世間の美術の評価で、美術が素晴らしいねって言われる人って、だいたい数学ができない人なんですよ（笑）。頭悪いやつほど美術世界では評価されているんですよね。例えば、ジミー大西ちゃんなんかは、まあ、どっかの教科多分できないと思いますけど、それが功奏してよかったりとか。だから結構ね、こっちが突出してできてると、こっちができてなかったりとかいろいろあるんで、そこらへんが押しなべて全部できる人間が、その評価が高いっていうのは、ずっと子どもの頃から思っていましたけど、それはおかしいんじゃないかと。だから合計点４５点というのもおかしいし、あと学校間格差があって、先生って神じゃないくせに絶対評価だって言うわけですよ。神じゃない人間が絶対評価が下せるはずがないわけで、ある学校なんかだと、オール５の子は他の学校行くとオール２ぐらいになったりするような中学校の格差は、多分愛知県でも、まあ名古屋市は特にあると思います。おおっぴらには言えないですけど、例えば名東区の方の学校と中川区の方の学校だと、その微妙な差はあるし、あと学校が、要は東京なんかだと学校の先生がたくさん受からせたいために、水増しするんですよ。それで、ある学校では厳しくつけると。ある学校では先生に反発する親子は低くつけるとかね。まあそういうことがあってですね、これ実は何で始まったかっていうと、名古屋の中学校の先生やっていたときに、ちょうど校内暴力が荒れたわけですよ。で、それの先生の抑止力、子どもに対する抑止力のために、内申書といって脅しをつけたんですよ。そしたら校内暴力が収まったという、これぶっちゃけ話そうなんですよ、基本的に。だから、生徒たちを、父兄を手なずけるための場当たり的な政策が、結構内申点を重視したというふうに、俺は見てるんですよ。まあ、多分そうじゃないという人もいますけど、現実はそうだと思います。だから、そういう意味で本来のそのきちんとした、その人にどういう能力があるかということの評価に、４５点満点の通知表の点数は、間違いなんじゃないかなって思っていて、それを解消するためには、内申点っていうのは、もっと評価を下げるべきだという提案です。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

まず、今の複合選抜制度ということですが、まず入試制度というのは、できる生徒つまり上位グループの生徒は、たぶん希望の高校に入ることができるんです。上位グループでない生徒にとっては、制度を変えるとなると、メリットに感じる人もいるしデメリットに感じる人も両方あるわけで、それを一つにまとめるとなると大変な作業になると思うんです。

先ほども言ったように、子どもの数が減ってきて１人１人の底上げを図るということがこれから大事だと思いますので、そういう人たちが学べる入試制度がどうあるべきか。さっき知事がおっしゃったように、２５年経った今、当時と状況が変わっていますから、そういう人たちが学べる入試制度もどんどん変わっています。これからの２５年を見据えてどう入試制度を作っていくかということが課題になります。ですから、焦ってはダメだというのはもちろん分かっていますし、さっき村上先生も言われたように高校進学率を上げても､それが必ずしもよくないんだよという意見も含めて、高校進学率は、どういう形であれ、上げるような方向はやっぱりとっていった方がいいだろうと思います。その中に落ちこぼれる人がいるわけですよ。そう人たちをどう救って、どう社会に役立てていくか、その人の人間としての成長をどう図っていくべきか、これは教育の責任ですから、そこを無視して考えるべきではないと思います。そういったことをきちんと考えられるような入試制度にしていただければと思います。

今、高校が大学入試一辺倒になっているんです。やっぱり基礎教育を高校の１５歳から１７歳まででどう形成していくのかが大切。大学に入らなくたっていいわけですよ。その人が一生、幸せに送れればね。だから必ずしも目的は大学に入ることではないんで、そういう教育を高校のとき、あるいは大学を含めて、どう実現していくかで言えば、高校と大学の接続というか、連携というのが非常に大事だと思っています。それで、さっきも言ったように、色んなことをやってるわけですが、例えば、高校も大学も一部でもいいですから、一部定員を愛知県の大学と連携して新しい仕組みをつくる。愛知県は地元の大学への進学率が一番高いわけですから。だから、そういう利点を活かしながら、例えば、高校卒業の資格試験システムを作って、試行定員として確保し、一部でいいのでやってみるとか、そういうようなことは多分できると思うんですね。それで、その子供たちはどう成長していくか。ＡＯ入試ではない。ＡＯ入試はとてもじゃないけど、うちの大学ではやれません、やってませんけども、そういった県内における新しい施策の方法を、高校の入試と絡めて考えていく。高校での基礎教育の充実も含めて考えていければいいなという夢のようなことを考えているわけです。まあ新しい試みも含めて考えていただければいいと思います。

内申点の問題ですが、僕もやはり若干高いのかなと思います。愛知県の場合は、い

ま４０か６０かと言っておられましたけど、これを３割程度に抑えるとかというふうにして、教育の重要性が分かる、受験生の努力というかそういうものを評価していく。こういうことも議論になると思います。あとは、地域の高校なのか、高校全体がランク付けされたのか、大学と一緒で、輪切りになってランク付けされています。そういうことで本当にいいんだろうか。これは入試制度だけではないと思います。では、これからはこうした地域の高校をどう育てていくべきかという観点と、全県で一学校区という形か、この二つは対極にありますけど、こういったことも入試制度の改革では議論して、これからの高校のあり方を考えていくことが必要。大学には６割の人が行きますから、高校の進学率が全日制で９０パーセントでいいんだということには僕はならないだろうという気がします。そういうことも含めていろんな層からの意見を反映できる形で、これからの検討をしていただければありがたいと思います。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

私も少しは高校の選抜に関わってきましたけども、いろんな経緯があって、いろんな形で時代に合うように変えてきたであろうことも事実だと思うのですね。特に内申書のウエイトの問題、これが本当に競争を下げちゃっているのか、意欲なくしているかっていうと、私も検討すべきなら検討すべきだと思っております。

ただ、私は、いま松田先生がおっしゃられたように、高校が大学入試一辺倒になっているというけれども、今、５５パーセントから６割が大学に入れるようになったとすると、とにかく選ばなきゃ大学は入れちゃう時代であって、全体で学力下がってきているのですよ。高校の生活は、かつてよりのんびりしていますし、エンジョイしていますよね。これがいけないとは私は言っていないのです。確かにエンジョイしながら朗々と自分のことを発揮しながらやるというのは、これはいいことなのです。そういう面で高校側が、そういう中で自分の実力を発揮しろとかということができれば、これはいいことだと思いますし、それは考えていかなければいけない。それともう一つですが、それぞれの地域で、勉強で頑張ってどこかに行きたいという子どももいる。地域で頑張っていきたいというのがあってもいいはずなのです。

そうしたときに大学と高校の関係が直結していて、もう少し先が見えるようなことになれば、高校に入って頑張れると思えるのです。愛知県はこれまで学力なりでも頑張っていけるように地域で山を作ってきたわけです。その中に地域の特徴を活かした形の学校づくりと入試づくりがひっかかってくると私は考えていけばいいし、そこに内申書と学力の問題があり、どちらをどう高めるかということが議論すべきであれば、それでもいい。言うなれば、地域でそれぞれ特徴があって自分の学べる状況ができてくれば、私はもう少し学力も上がってくると思います。今の学力では。大学で入って

からそれこそ基礎学力テストやらなきゃいかんわけですよ。こんなことやっていて、本当にこれ大丈夫かと思う。

大学に入ってから考える人も多くなってきている。考えられない人もいるわけで、これからどうしていくかを、中学校、高校それぞれの中でしっかりキャリア教育のなかでやっていたかないと、これはやっぱりこれから大変だと思っております。

特に、今までやってきた中では、私は人を測るときに学力だけで測れないと思うのですよね。そういう点では、内申書というのは、中学校までのいろんな能力を評価しようという形でやってきている。考えてみますと、相対評価から絶対評価に変わったときの変化というのは、実は相対評価の方がもっと苦しんでいたケースが多いわけです。学校によって全部、率が決まっているわけですよ。それに対して絶対評価になって少なくともある基準の中で先生方が方針を受けながら、やってきたわけですね。相対評価から絶対評価に変わって、内申書に対していろんな危惧が出てくるわけですが、内申書がある面だけの内容をみているだけではないと思います。子どもたちは毎日、手挙げなかったらとか考えてないと思う。しっかり評価できるには、教師の力が必要になってくるとは思うのですけど。基本的には、この内申書について、全体的に議論すべきならすべきであり、そのあり方を検証すべきだと思う。

あともう一つ、いまある高校に入ったときにですね、そこでダメになっちゃったら専門学校に入んなきゃいけなくなる。本当は転学科も出来るのですね、転校も。ここでダメだったときに、他のこういうところ行きたいというのがあれば、それができることがもう少しあってもいいと思う。大学でも転科あるのですけども、なかなか活用されてないのですけども。そういうことも、もう少しあってもいいかなとも思っています。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

親の意見を集約してきました。河合塾の中学グリーンコースで、中学生が通う父兄の方に、現行制度で「いい」と思いますか、「悪い」と思いますかと聞くと、結論から言いますと、６：４で「いい」と言っています。ただ、内申点の話はこれに含めておりません。とりあえず、総合入試という制度がいいのかというと、６：４でいいと言っている。

６が県内にずっと居る人、４が他県から来た人という特徴がありまして、つまり、ずっと愛知県内にいる人はいい制度だというふうに思っているわけです。じゃあ何がいけないのかといいますと、愛知県以外の人にとって、制度が分かりにくいし、何回も受けなきゃいけない。結局、第二志望に回されてしまって、モチベーションが下がった高校に行く割合が高いというのです。また、内申点の割合が高いという声もあり

ます。あるいは絶対評価になってから高くなったという意見もあります。

しかしながら、今の状態を全く否定するという声は、多数派ではないという感じがするので、部分的に改革すればいいのかなと思います。しかし、抜本改革するなら、個人的には江川さんが言うように、各高校が独自問題を作って、１年間の成績で行く高校が分けられるという制度がいいです。でも、やはり現実的というか、部分的な改革となると焦点は資料７にある３点になると思います。私は、1 点目の「２校受験が可能」という現行制度は、いいと思います。他県から来た人はちょっと奇異に感じるかもしれないけど、国公立大学も基本的には前期後期、受けられますし、２回受験という制度はいいだろうと思います。そのやり方をどうするかというのはいろいろ議論があるかと思います。

それから、2 点目の「現行の群及びグループ分け」というところについては、ここではコメントは避けます。3 点目の「推薦入学について」は、多様性の確保だとか、学校の裁量とか、部分的に非常に特殊なケースもあるわけで、学校長の推薦があるという制度そのものは否定しないものであります。

その上で、入試問題が学校のカリキュラムを決めるという前提に立ったときに、グローバル時代を支える未来の子どもたちを作る選抜の方法というのが、実はカリキュラムを決めていくんだと考えます。今は、英語、数学、理科などの科目ごとの知識理解が中心ですが、これからは、その知識をどういうふうに活用して、自分の問題として置き換えて問題を発見して解決していくのかという力が問われてきます。新学習指導要領の「活用」とか「探求」といった部分を入試の中にいくつか課すべきだと思います。

私は、PISA 型入試といわれる問題発見解決型の客観問題や論述問題を愛知県がモデルを作って問題を示して、できれば県が学力テストやって、一定の時間を使って、知識をベースとした活用問題を、複数回行う入試のうちの半分はそれを課してはどうでしょう。そうすれば、学校のカリキュラムは変わります。さらに、コミュニケーション力、意欲、関心はペーパーテストでは測れないと思いますけども、丸二日ぐらいかけて、ディベートさせたり、集団面接させたり、あるいはどっかに行って、具体的に夕食を作らせたり、風呂を沸かせたりしながら作業の中で、そういったのを見る。色々手法はあると思います。観察評価というんですが、片方の入試はそういうふうにすればいいと思います。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

３つのポイントで申し上げたいと思います。１つ目は、今までの皆さんがおっしゃらなかったことなんですけども、公私の役割分担です。今、公立の入試制度に議論が

集中していると思うんですけどれも、資料を拝見すると、県立・市立と、そして私学というのは、だいたい２：１の学校の比率で存在します。やはり、公立・私立が、いろいろ特色を発揮しながら、役割分担して愛知県の教育をつくっていく、これは紛れもない事実だと思うんですね。私は愛知県住まいではないので、詳細がよく分からないんですが、これからの少子化のトレンドを考えますと、多分、今の入試の方式では、公立に人が集まり、定員割れを私学が引き受けていくことになるのではないかと思います。そうすると、多くの方が、愛知は公立志向でございますので、公立に行くということになります。自然の流れから見ると、成績のあまり芳しくないお子さんが、私学に行く可能性も出てくるのではないかと思います。つまり、私学の偏差値は下がってくるということです。今、社会でも問題になっているのは、学力と経済力との関係で、そうなると、ナショナル・ミニマムと言いますか、シビル・ミニマムと言いますか、本来は公の責任で生活指導や学校外の部分をケアしなきゃいけないお子さんたちも、一部私学にいるんではないかと思うんですね。生活保護世帯の割合とか、シングル・ペアレント世帯の子供さんとか、生活指導の面で若干のケアが必要な人たちが私学にいるという可能性もあります。しかし、生徒一人当たりの補助金には公私で差があり、私学と公立がきちんとフェアな競争条件の中で、特色をどうしていくのかということを、ぜひ考えていく必要があると思います。

２点目は、内申書です。私は、江川さんがおっしゃるように、ドラスティックな改革をするには、それぞれの学校が「うちはこうやるぞ」という旗を立て、先生を募集し、そして教員の流動化を図り、独自の試験方式もやる、これがいいと思うんですよね。皆さん、「COULD DO BETTER」という本を読まれたことはありますか。これは、天才や偉人と言われる人達の小学校時代の通知表に何が書かれてあったかという有名な本なんですけれど、アインシュタインの小学校の時の先生は、「この子の将来に何も未来はない」と書いているんですね。多分、相対性理論を生んだ子供の頭脳を、その当時の先生は理解できなかったということだと思います。それで、企業でも評価をする時に、評価者研修とか、多面的評価とか、ダブル・チェックというように、評価者が正しい評価をしているのかどうかということをちゃんとチェックする仕組みがあります。先生も万能ではないですので、主観で書いていて、好き嫌いでかなり厳しい評価を付けることもありますし、それが物言わぬ子供達を生んでいて、目に見えぬ圧力になっていることも事実ですが、一方で、学級指導がやりやすいと、物言わぬ圧力をかけておとなしい子がたくさん増えてくると、功罪両方あると思うんですよね。

ただ、私は、制度が厳然とあるのであれば、よりよい制度にしていくにはどうするかということも併せて考えていくべきだし、皆さんがおっしゃったように、比率をどうしていくのか、ダブル・チェックの仕組みをどうしていくのか、保護者や子供にと

って公開されない仕組みをどういうふうに改めていくのか、ということも含めて考えていかなければいけない。高校側にとって、１回の入試でいやであれば、例えば、学力到達度みたいな試験を２回、３回受けて、その平均点で出願できるように何かする、そういう工夫もできるのではないかと思います。

最後のポイントなんですけども、今、議論している教育の仕方、入試制度なんていうのは、やはり、教育のゴールをどう設定するかに大きく関わってくると思うんですね。例えば、昨日、私、インド人の方を対象に講演をさせていただいたんですが、インテルに勤めたインド人が、電気もない地域にコンピュータみたいなものを売りに行くのはいやだということで、今、東北に支援に入って、冷蔵庫付きの車を５万円で地域にリースして、農産物で奥さん達がお弁当を作って、売りに行って、小銭を稼いで、自立できるようなＮＰＯを設立しているんですね。つまり、企業経験がありながら、国際的草の根組織で活躍できる人材や、これから日本が世界に競争力を持てるような生命科学とかですね、航空宇宙の分野で活躍できる理系に強い人、若しくは、モノづくりで秀でた人間をどう育てていくのか、女性のアントゥレプレナー（起業家）をどう育てていくのか。やはりゴールがあってこその改革だと思うんですね。小手先に入試制度をいじったとしても、こういう人材は絶対に生まれないですし、こういう人を生みたいからこそ、さっき言ったように、芸術や書道の才はどうでもいい、理科だけを評価していくというようなことも・・・

＜漫画家　江川達也氏＞

逆には、理科を評価しないで美術だけを評価するという形もある。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

私も、江川さんのドラスティックな考えは面白いと思うんですけども、今それをやると、逆にね、じゃあ、スーパー・サイエンス・スクールに入ったら、もう理科だけで、美術の時間を止めちゃおうっていう、子供のモチベーションが下がることも考えていかなきゃいけないと思うんですね。功罪にらまなきゃいけないんですが、どういうゴールなのかということが明確でない限りは、やはり、皆さんの意見が、自分の意見の主張に終わってしまって、収束していかないような気がいたします。

＜愛知県経営者協会専務理事兼事務局長　柴山忠範氏＞

私は、学校群の始まる前の古い生徒でありましたので、１校だけ受けた訳ですが、その時は残念ながら失敗をしまして、敗残兵として私学へまいりました。

今、私、社会人になってよく考えるのは、やっぱり、教育界というのはちょっと特

殊な世界と感じます。例えば、希望する学校へ行けないということは、就職で希望する会社へ入れないということですよね。それから、格差の拡大、会社の中で格差だって山ほどある。こういう挫折ですとか、社会の不条理、まあ教育界から見ると不条理なんですが、その産業界を見ると、ごく当たり前のことです。ですから、こういったことを、中学生の１５歳にあえて経験させろとは言いませんが、ある面で、入りたい高校に入れない、やはりこれは自分の努力で何ともならない、何らかの力があるということも理解しなければならないし、世の中、学校の差というものが、どうしても必然的にあるということも、学生のうちから少し理解をしないと、社会へ出たら、すぐさまそういうことが起こってしまう。そういうことをなくそうとすると、今度は、学生さん達が世の中へ出た時に、不適応が起こるようなことを、私どもは心配しております。今、企業の中では、そういう学生時代、子供時代に、失敗したり、何らかのうまくいかないことを経験しないままに、ずっと育ってきた子供たちが社会人として増えてきているので、会社の中で少し問題になるのではないかと。これは我々の、あくまで推論ですが。ですから、この入試制度も、どういうふうにしろという、残念ながら、私は見識がないんですが、あまり角を矯めすぎて牛を殺すようなことをしないほうが、私はいいと思います。

それから、個性といった問題も、確かにごく一部の人にとって個性的なことはいいでしょうが、全体的な、今よく言われている中間層の厚みを出すためには、やはり基本的なことをしっかり押さえるということは重要で、そういったことを念頭に置いた入試制度でなければいけないというふうに私は思います。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

資料を作ってまいりましたのでそれをご覧ください。５ページも作っちゃったもんですから、時間がかかりますけれどもなるべく短くやります。この中で私は入試制度私案というものを持ってまいりました。なんで持ってきたかというと、この懇談会は全部で６回くらいと聞いておりますけれど、入試制度以外にもほかにも色々扱うべきテーマがありますので、なるべく議論を進めやすくするためにちょっと整理したいなということで、私の考えをまとめさせていただきました。

私は前回の会議以降、生徒、受験生や保護者の方、あるいは中高の公立私立を含めた先生、あるいは現職の高等学校の学校長さんとか、いろんな方の話を伺って、いろいろ勉強させていただいた上で、これを作ってまいりました。

まず、最初のページの方向性の話は、ざっと見ていただいて、多分事前に皆様方のお手元に行っていてご覧いただいていると思いますのでここは飛ばしまして、２ページ目の改革の論点というところから入らせていただきます。今回の論点は、もう皆様

の議論にも出ておりますけれども、ポイントは複合選抜制度が良いのかどうかという話と、内申点をどう扱うかというこの２点に絞られると思います。

まず、現行の複合選抜制度の前の学校群時代を振り返りますと、やっぱり様々な問題があったわけです。その前の単独選抜時代は旭丘を中心に突出した進学校があって、そういう飛び抜けた学校と学校間格差を是正しようということで、学校群制度を始めたのですが、実際やってみると今度は学校群の中で格差ができました。それから、第１志望に行けない子が半分出るわけですから、そこのところで問題が生じてきたのですね、ですからこの複合選抜をスタートした時というのは、第１志望を頑張れば実現させてあげよう、だけども昔の単独選抜に戻してしまうと、昔みたいに特定校がポンと突出してしまうので、それはいかんでしょう、県内の各地域に拠点となるような進学校を分散させたいという、ねらいから多分この制度が作られたのだと思います、基本的に複合選抜は考えれば考えるほど大変良くできた制度だというふうに思います。

ただ、これができた当時は良い制度だったと思いますけど、いかんせん時代が変わってきました。複合選抜に関しては私は２点気になることがあります。１つ目はまず学校格差というのはあってはいけないのか、あるいは縮めるべきなのかという点、つまり学校の序列化は悪なのかという点です。第２点は、複合選抜は、第１志望はかなえられますけど、第２志望の選択がすごく狭くなるという制度ですから、第２志望に回ったときの生徒の満足感を軽く見ていいのかという点です。私は今日の会議の前段の特色ある学校づくりの話で、私が特色ある学校づくりには、自分の行きたい学校を選択できるということが必要だという話をいたしましたけど、それに関連することとして、やはり第２志望であっても自分がまあここなら納得できるかなというところに行かせてあげられるような仕組みにした方がいいと思います。それをやろうとすると、序列化が加速するという部分がありますけれど、そこのところは昔とちょっと事情が違うんじゃないかなと私は思っています。

序列化の話に関して、私は経済が専門ですから、ちょっと教育の方とは視点が違うところから申し上げますと、今この愛知県あるいは名古屋、東海地域というのは、これから大きな国際的な都市間の競争にさらされていきます。リニアが１５年後にできると東京と４０分でつながる。その時に東京にストローされない、国際的に確固した地位を確保できるような都市圏であり続けてもらいたい。こういう視点で考えますと、今の愛知に決定的に欠けているのは、いわゆる、この業界でいうとクリエイティブクラスという人たちに住んでもらう環境です。クリエイティブクラスっていうのは、要は経済成長を促すような職業、高い付加価値を生む職業についた人たち、ちょっとニュアンスは違うんですが、エリート層って言っても、ある程度オーバーラップできる概念だと思いますけれど、そういう人たちにより多く住んでもらうっていう環境を整

えておく必要がある。その点で言いますと、名古屋、愛知県は残念ながら弱い。例えば大企業の名古屋支店や支社のトップの方々は、ほとんど皆単身赴任で来ます。なぜ単身赴任で来るかってというと、それは名古屋に自分の子どもに行かせたい学校がないからだと。彼らは自分の子どもは、東京の中高一貫とかに入れておいて、本人だけはこっちに来るわけですよ。私なんかは、もともとずっと愛知県の生まれ育ちですから、旭丘だって、岡崎だって、東海だって立派な進学校に見えるんですけれど、東京目線ではどうもそうじゃないらしいということなんですね。これは、良いとか悪いとかという話じゃなくて、やっぱり名古屋もリニアができる。それから国際空港もできた。そうしたものと同列の大都市として必要なインフラの１つとして、全国のトップ校と互して競える、それは大学の進学実績だけではなくって、教育の中身についてもクォリティの高いものをやるという学校が必要じゃないかという考えを私は持っています。その点で言うと、学校の序列化というのは避けて通れない話だと思います。

もう１つの論点の内申書の話ですけれど、内申書については、いろんな方にいろんな意見を伺って、特に高校の先生からは、内申は入試の物差しとしては全然あてにならない、つまりあまりにも学校間の格差が大きすぎるとの声を聞きました。ある学校のオール５とある学校のオール４より下っていうのは、ある学校のオール４より下の方が成績の良いことはいくらでもあると。その内申を入試の選抜の物差しで使うというのは無理があります。入試というのはやはり公平性が重要ですから、公平性の観点からやはりまずいと思います。あるいは、もう１つ、学校による評価の付け方の違いというのもある。さきほども話がありましたけど、ある学校は生徒のためを思って内申点をぐっと底上げする、またある学校はかつての相対評価に近いような分布でつけてくるところもあるというように内申の付け方もまちまちだというお話も高校の先生から伺いました。そういうふうに、学校間の格差、それから（評価の）付け方の格差っていうのがあまりに大きいものですから、入試の中で４割や５割っていうのをみるっていうのは、やっぱり入試の公平性という部分で問題があるというふうに思っています。ただ一方で、あんまり内申はみなくて良いかっていうと、これは現実の中学校の授業運営の中で、内申点っていうのは、先程いろんなご指摘がありましたけど、学校現場での抑えになっているっていうのは事実だと思うんですね。ですから、そこのところのバランスを考えてというところが、資料の３ページ目に書いてある私案でして、具体的に何を言っているかというと、入試制度に関していろんな方に伺いますと、特に生徒、保護者の方は２回受験はやってくれとの要望が強い。１回は恐いと。病気になるかもしれないし、２回受験に対して否定的な意見というのは１度も聞きませんでした。ですから、２回受験はそれだけみんなが喜んでいるのであれば別に変える必要はないので、制度としては前期・後期制の２回というのを考えています。この前期・

後期の募集人員に関しては各校長、各学校のご判断にお任せします。９：１で前期を多くしてもいいですし、ある学校は後期でたくさん前期で落ちた子を拾うために１：９でも構わない。そこのところは学校の特色づくりの話にも関連するものですから、学校の裁量に委ねるのがいいと思います。

それから、学区に関してですが、１学区が望ましいというふうに思っています。尾張と三河で学区が分かれているというのは、愛知県のいろんなところにものすごく悪影響を与えていると思っています。例えば、今、ある市長さんが尾張名古屋なんとかとか一生懸命おっしゃっていますけど、あの考え方っていうのは、まさに尾張と三河は別々よと言っている話で、国際的に地域間競争をやる中で、尾張だ、三河だ、なんて言っている場合じゃないのに、尾張だけちぎってまとめるというのは、あまりに前時代的な感じがして、こういうものも学区が分かれていることによる見えない壁になっているというように感じています。ですから、かつて、尾張と三河で学区を分けた理由というのは、尾張と三河を別々にしないと、三河から尾張の旭丘とか千種とかにどんどん生徒が流れてしまって、三河の学校がダメになっちゃうからということで仕切ったわけです。その時点ではまあしょうがないのかなと思いますけれど、今は進学実績という部分で言うと、逆に三河の方が立派な学校がたくさんあります。東大に10名以上入る学校は、今、尾張は旭丘と一宮ですけど、三河は岡崎、刈谷、時習館の３校ある。もう三河から尾張へ生徒が流れるっていう危険性は極めて少ないと思います。ですから、これは学校選択の自由を広げる意味でも、これはもう一緒にまとめた方がいいだろうと。当然ながら全学校を自由に選択できることが必要と思いますので、群・グループ制は廃止ということになります。

内申に関しては、当日点と内申のウエイトは各校に判断を委ねた方が良いと思います。つまり、今は３通り選べる中で進学校は当日点重視の選択をしているわけですけれど、一方で内申を重視する学校もある。何でかっていうと、それはやっぱり学力よりも、ちゃんと授業を聞いてくれるかとか、提出物を出してくれるかといったことの方が大事だと考える学校もあるわけで、それは各学校によって違うわけです。そういう学校に関しては、今はせいぜい当日４、内申６ですけれども、それが３：７だって、２：８だって、１：９だって、まあ当日試験をやらないわけにはいかないでしょうが、そういう極端な内申重視の学校というのもあっていいと思います。

募集人員を前期と後期に分ける時に、前期も後期も全体的に内申のウエイトを軽くしきってしまうと、勉強のできる子はもう授業を聞かなくて、副教科の授業でずっと塾のテキストをやるっていう子がやっぱり出てくると思うんですよ。それを避けるための現実的な対応としては、同じ学校でも後期は必ず前期よりも内申を重視するようにしました。

この私案のような入試制度にしますと４ページ目のところ挙げた問題点、例えば学校序列化が進むとか、中学校の進路指導に影響が出る、前期に落ちた子が大きなプレッシャーを受けるなどが出てきます。

それから、学校運営への影響で１つ気になるのは、２点目のところの中学校の進路指導への影響です。中学校の今の進路指導は、各学校の内申点とその学校の実力テストの成績とその学校の過去の高校への合格実績をもとにやっているわけですが、内申点が軽視されると内申点が合否の目安にならなくなって、業者テストに依存する部分がすごく強くなってしまう。業者テストが悪いのかどうか、文部科学省はダメだと言ってるわけですけれども、ここのところについては、何か現実的な対応、例えば、県によっては業者じゃなくて中学校校長会というのが半分オフィシャルな形で、進路指導のための学力テストをやるようなことが行われていますけど、そのような対策、方法も現実的にはありうるのかなというように思います。

あと、資料には書きませんでしたけど、もう１つ、これは高校の学校長の方からご指摘いただいたんですけれども、高校の入試事務負担の問題があります。やっぱり前期、後期それぞれ入試をやると、高校の現場は大変です。日程もすごくタイトになるので、３学期の授業が今でもわりと難しいけれど、もっと難しくなるということもあります。その辺りを含めて実務的にいろいろと考えていかなくてはならない課題は残っていると思います。

最後の５ページ目は入試制度の話じゃありませんけれど、前回の時に少しだけ出させていただきました。これは複合選抜になったからかどうかはわかりませんけれども、現在の愛知県の公立高校の分布上すごく気になっているのが、進学校の空白域というのができてしまっていることです。５ページ目の左側にマップがありますけれど、今春の名古屋大学の合格者をマルの大きさで表しています。これをご覧いただきますと、この黄色に塗られている部分、これが名古屋の中村、中川、港、それから蟹江とか津島とか、弥富とか、その辺りですね。これが進学校空白域です。過去この辺りでも名大にそこそこ入る学校があったわけです。その右側に「エリア別に見た名大合格者数の変化」というグラフがありますが、進学校空白域に該当しているエリアからの名古屋大学の合格者数が一番下のところの赤い太い線で書いてありますけれど、学校群時代には、この辺りにそこそこの進学校が数校ありましたので、ある程度の数を維持していましたが、複合選抜になってほとんど名大に行けなくなってしまった。

名古屋市内からなら公共交通機関がちゃんと発達していますから、別に西の方から東の学校に行くことは容易なことなんですけれど、弥富とか蟹江とかいったところになりますと、名古屋の東部の進学校に行こうと思うと、電車を乗り継いでという話になってしまう。同じ県内にあって、こういう地域があるというのは、やっぱり行政と

して何か手当てしていくべきかなと思います。ただそれを入試制度でいじろうとするとちょっとややこやしいことになってしまうので、私は個別に進学重点校みたいなものを作ってやっていけばいいのかなと思います。

＜大村知事＞

ありがとうございました。ひとあたりお聞きするだけでもう時間が限られてまいりましたが、それでは、今回特にお越しいただいた村上様と江川様からまたお一人ずつご意見いただきたいと思います。

＜中京大学現代社会学部教授　村上隆氏＞

入選協の議長として、先ほど申し上げた有識者会議の議論に委ねたいと思います。そのときにぜひご配慮いただきたいことが３つあります。

まず１つは、入試制度というのは、皆さんからお話が出ているように、メリット、デメリットがどんな制度にもあり、結局はバランスということになると思うので、適切なバランスを求めていただきたいということ。

第２に、事実に基づいた議論をしていただきたい。証拠に基づいた議論をしていただきたい。これはいろんな形で既に２５年間のデータが蓄積されていると思いますし、それらを改めて分析をするということも含めて、事実に基づく議論をぜひしていただきたいということであります。

３点目は、既に皆様方からかなり出ているとは思いますが、制度がある目標を持って、例えば数値目標を持って作られたときには、うまくいかないこともあります。例えば共通一次試験の導入に当たって、当時の坂田道太文相は「東大だけが突出しているのではなくて、八ヶ岳みたいなものを作るんだ」ということをおっしゃられたが、全くそのようにはならなかった。しかし一方で、それに近い状況が実現しても、数値目標としてはうまくいったんだけれども、全く意外な副次的な、二次的な効果が見られるというのは入試制度においては常にみられることですので、そのあたりまで十分配慮した上で、制度を考えていただきたい。事実に基づくシミュレーションを十分にしていただきたいと思っています。

＜漫画家　江川達也氏＞

数学ができる子には、ほかはいらないみたいなことを言ったんですが、例えば漫画家になりたい人は学校の勉強が役に立つかと聞かれると、役に立たないわけですよ、基本的には。むしろ学校の勉強ができない方が漫画家として大成する傾向にあって、高学歴の漫画家で成功した人はあんまりいないんですよ。それは漫画がどっちかって

いうと息抜きになっているので、あんまり説教くさいことや高度なことを書くと売れなくなる。あと美術系もそうなんですが、絵が上手すぎると売れないということがあって、普通の人向けに描いているというのがある。

何が言いたいかというと、職業って多様にあるわけですよ。進学系のものを伸ばすことはそれはそれでよいし、普通の人間の平均的な学力を上げる学校があってもよいと思う。だから高校の多様化って言った場合に、ちっちゃい多様化ではなくて、もっともっと大きな多様化をすべきであるし、そうするときには確実に学校関係者だけでは無理なんですよね。それは学校関係者は学校のパラダイムの中に生きていて、その価値観しか知らない。

例えば、ちょっと前のことですが、漫画を学校に取り入れようといいながら、漫画家があんまり呼ばれていない、というかあまり優秀じゃない漫画家が呼ばれている。人選ミスだろっていうくらい、漫画学科の先生はちょっと漫画家として能力どうなんだろうという人が多々いた。ちゃんとした人材をよそからきちんと入れてきて、頭を下げて、自分たちの今までの常識を消して、僕らが知らない職業に対して、何が役に立って何がどうなっているかということをもっともっと真摯な形で腰を下げた形で吸収していく必要がすごくあると思う。

家庭科、音楽、美術っていうカテゴリーはあるんですけど、もっといろんなカテゴリーがあって、新しい特色ある学校を、学力というのもありだけど、それ以外のベクトルを持って新たに作る、数学ができる人はこの学校には絶対に入れないとか、すごい何かができる人は入れないという逆転現象的な評価基準があった方が役に立つんじゃないか。ある分野ではそれができるために、それが足かせになったりしますから。ちがう意味でのエリート教育っていうか、学校の世界でのエリートは、実は社会ではかなりエリートではないです。あるものがすごくできるってことは、あるものが足りない、それに対してそれを全部補強すべきなのか、そればっかり伸ばすべきなのか、それもまた学校の特色があって、多種多様なベクトルに向けて学校全体が変わると。例えば小・中学校で劣等性だった人間が、実はある才能を見つけて伸ばせるような、そうなったときにはそういう高校を作るべきなんだけど、その高校がどういう教師を養成するかが問題になってくるので、そういうときには学校教育とは関係ない職業の人たちを入れて、個性ある学校をつくればいいと思う。そういう意味での多様化をもっともっと図っていくべきだと思います。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

さっきも言いましたけども、いろんな意見を聞いて、非常に意見は多様なので、そのあたりをどう集約していくのかという、さっきの村上先生の意見も踏まえて考えて

いかなければいけないと思います。

いずれにしても高校の先生、中学校の先生も含めて現場の先生が大変忙しい中で生徒を預かっているので、いろんな注文を出すのはいいのですが、そういう人たちが働きやすいようにどう環境を作っていくかというのは行政の責任ですので、そういうところにも気配りして、これから議論が前進できれば大変ありがたいと思う。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

全ての人が東大・京大に行けるわけではないことはみんな分かっているわけで、それぞれにあったところの高校教育、大学教育を受けたいとみんな願っている。そういう幅があることが重要だと思う。

それからもう１つ、教員にゆとりがない。先生の人材の育成は学校教育にとって最も大事だと思っている。中教審が先生の修士の義務化を出しましたが、これからもっともっと先生が育っていかなければいけないので、先生のインターンシップなどをもっと活用して、いろいろと先生の資質を上げていただきたい、愛知県が率先してやっていただきたいと思っている。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

１つだけ。最初のところの議論で「普通科は多様性はいらない、標準化が必要だ」というご意見があったと思いますが、私はそれにすごく反対で、普通科を標準化しちゃうと学力の序列だけになってしまう。冒頭の特色ある学校づくりでもいいましたが、普通科こそが「うちは部活だ」「うちは進学だ」などとより一層特色付けることが必要じゃないかと思う。ここのところだけすごくひっかかったので一言わせていただきました。

＜中京大学現代社会学部教授　村上隆氏＞

私は内部で個性を対応すべきだと申し上げたのであって、特色というのは歴史であり、伝統であり、そういうものの上に積み重ねていくものであり、いきなり校長が一人でリーダーシップをとって作りだせるようなものではないと思っています。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

そこのとこを否定してしまうと、学校長のがんばりどころがなくなってしまうのではないですか。

＜中京大学現代社会学部教授　村上隆氏＞

いくらでもがんばりどころはあると思いますけど。

＜大村知事＞

ありがとうございました。ちょうどお時間になりました。今日はたっぷりとご意見をいただきましたが、皆さんのおっしゃることはもっともだなあと思うものばかりでして、私も大変興味深く聞かせていただきました。

私も申し上げたいことがありますが、私が言うのはどうかと思いますので。今日のいただいたご意見しっかり受け止めまして、教育委員会は教育委員会でしっかり議論していただく。

また、今日はこういうテーマでやりましたが、次回はテーマごとにやっていきますが、それはそれといたしまして、折々にご意見をいただければと思いますし、直接、事務局の方にも思いついたことやご意見ございましたら、お寄せいただきたいと思います。

まあ、いずれにしてもこういうテーマを設定したということは、設定しておいて何も考えないということはありませんので、方向としては、冒頭申し上げました特色ある高等学校をつくっていくべきではないか、多様化、国際化の中で、特に国際化というのは、愛知県では国際戦略をつくるという懇談会をやっておりまして、これはまったなしの課題だと思いますので、そういったことをにらんだ高校の多様化、それから子どもたちの視点に立った、もちろん親御さんのご希望にもかなうような、よりよい入試制度、選抜制度を、やはり１００％というのはないということはわかっておりますから、常にいろんな状況・時代をみて考えていくということが必要ではないかと思っておりますので、これからも皆さまのご意見を聞いて、しっかり検討していきたいと思っております。

今日の会議は以上とさせていただきます。長時間どうもありがとうございました。

（以　上）